

座間味島の地質

大城逸朗*

座間味島は、那覇の西方40kmにある慶良間諸島に属している。13余の島々からなる慶良間諸島は、前（メー）慶良間と後（クシ）慶良間と呼ばれ、前者は渡嘉敷村、後者は座間味村の行政区になっている。後慶良間の最北に位置する面積約6km²の小島が本調査報告の島である。

地形

全般に山勝ちの島であるが、大きくは集落地の阿佐付近を境に南西側ブロックと北東側ブロックに分けられる。南西側ブロックは、集落地座間味の北東にある高月山（海拔131.4m）、番所山（143.5m）から北～西方へと海拔100m前後の山地が連なる。このブロックにおいては、北海岸側は、山地が直接海に突っ込み、一般に急峻な地形である。一方、南海岸側は緩傾斜で沖積低地も発達し、集落地となっている。北東側ブロックは、島の最高峰大岳（海拔160.7m）を中心、久岳、中岳、赤崎の山地がいずれも海岸よりに連続して高所を形成している。北東側ブロックにおいても、北海岸側は、一般に急峻地形で人を寄せつけず、他方南海岸は沖積低地や広い海岸砂丘地が発達し集落地ともなっている。

水系は、複雑な水系模様をしているわりにはよくない。これは、山地が海岸にせまり、地形が急峻となり、そのため集水面積が小さくなつたのが原因であろう。

島では、内海側に面した南海岸は、海岸線も複雑に入り組むが、沖積低地や砂丘地がよく発達している。特に、沖積低地は海拔3～5mで面積も広く、集落地となり、さらに畠地や水田として利用されている。しかし、この沖積地をのぞいて明瞭な段丘地形は認められない。以上

の様な地形的な特徴は、本島だけでなく、慶良間諸島の他の島々においても共通にいえることである。

なお、島の中央部の高月山からは、慶良間諸島の島々が一望でき、本州の瀬戸内海を思わせる箱庭的な景観は、他に比類のない景勝地である。

地質

地質は、下位から上位へ片状砂岩、片状砂岩と千枚岩の互層それに片状砂岩勝ち千枚岩互層という層相変化を示す。

まず、片状砂岩は、阿佐の北東一帯に分布する。上部層との境界は、集落地阿佐を二分する所にある御嶽付近、阿佐の北西海岸それに阿佐の対岸で半島先端約500m手前の海岸側で観察できる（図版、A）。岩相は、粗粒の石英粒を主体とした塊状の片状砂岩で、顕微鏡観察の結果では若干の斜長石、微斜長石、絹雲母等を含む。色は、新鮮なところは白～灰色だが、風化すると茶褐色を示す。厚さ5mm～1cm時に10～15cmほどのうすい黒色の千枚岩を数枚挟在することもある。岩層の走向・傾斜はN25°～43°W、22°～30°SWを示す。

片状砂岩・千枚岩互層は、座間味から阿佐へ至る尾根付近の道路沿い、座間味から阿良への道路沿い、高月山付近それに番所山から北回りの林道沿いでよく観察できる（図版、B）。阿佐へ至る道路沿いの露頭では、千枚岩は黒色で所々石墨状を呈する。厚さ2～3cmから10～15cmの細い単位で砂岩と互層している。一方、砂岩は粗粒の石英粒を主体とした片状砂岩である。全般に等層厚互層であるが、高月山付近では片

状砂岩が30~50cmと厚くなり、北海岸側の林道付近では千枚岩勝ちの層相変化を示す。層理は明瞭で、層理にそった石英脈は眼球状に発達している。微褶曲構造は著しく、また数ヶ所で層間褶曲構造が観察できる（図版、C）。岩層は、緩るやかな褶曲構造を示しながらも、全体的にはN 20° ~ 63° W、 10° ~ 50° SWの走向、傾斜を示す単斜構造をしている。

片状砂岩勝ち千枚岩互層は、阿真以西の島の西端付近に卓越している。砂岩は粗粒の片状砂岩で、厚さは数mmから50~100cmと層厚変化が著しい。それに対して千枚岩は数cmとうすい。層理は明瞭で層間褶曲や斜交層理もよく発達している（図版、D）。岩層の走向、傾斜はS N、 16° ~ 18° W、からN 20° ~ 56° E、 14° ~ 15° NWと多少変化する。

なお、以上島の地質を構成する岩相の特徴をのべたが、各々の関係は一連整合である。

地質構造

弱変成作用を受けた片状砂岩層、千枚岩層は微褶曲構造がよく発達している。また座間味から阿真へ至る道路沿いや、阿佐の北東対岸側で、片状砂岩の著しい層間褶曲が観察できる。

しかし、島を構成する地層の一般走向はN 20° ~ 63° Wを示し、 10° ~ 50° Sに傾斜している。即ち地質構造上は、多少褶曲しながら南西傾斜をした単斜構造を示している。このことは、座間味村の他の島々ともよく類似している。（大城1977、1978、1979）

対比

地質は、片状砂岩や千枚岩を主体にした岩相からなるが、化石は発見されず、そのため地質時代は不詳である。しかし、岩相上沖縄本島の名護累層に類似し、対比することは可能である。なお、名護累層は、沖縄本島の北部の主要部分

を占める低度の変成作用を受けた千枚岩、緑色片岩それに結晶質石灰岩等から構成されたもので、下位から奥層、いのがま層、宮城層、安根層それにネクマチヂ岳層に区分されている。（橋本他、1976、渥沢他、1977）このことからすると、島を構成する地層は、名護累層の下部に相当する奥層、いのがま層に対比可能であり、特に堆積時期については古生代二疊紀ごろと推測される。（橋本他、1978）

まとめ

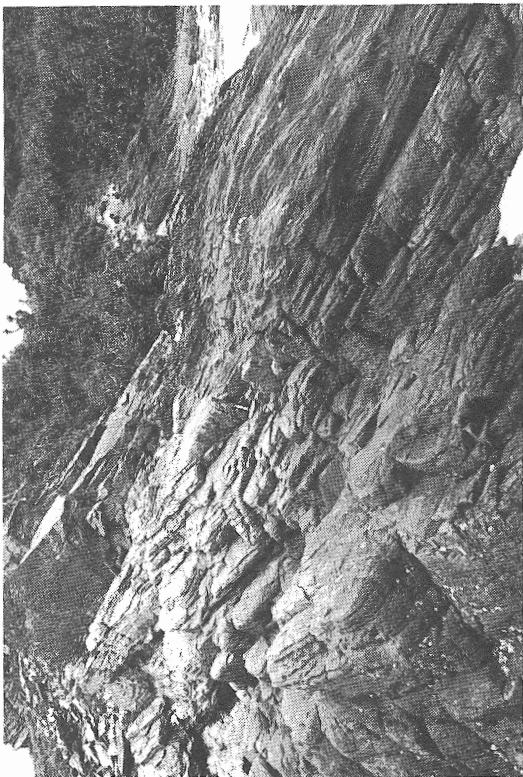
- (1) 地形は、全般に山勝ちで大きく南西側ブロックと北東側ブロックに分けられる。島の回りの海岸線は複雑に屈曲し、さらに南海岸側は沖積低地が発達するが、北海岸側はいずれのブロックでも急峻地形を示す。
- (2) 地質は、岩相的に下位から片状砂岩、片状砂岩・千枚岩互層それに片状砂岩勝ち千枚岩互層からなる。それらは各々一連整合で、島の東から西にかけて変化する。
- (3) 地質構造は、一般にN 20° ~ 63° W、 10° ~ 50° Sの走向傾斜を示し、多少褶曲をしながらも全体的には南西傾斜をした単斜構造である。
- (4) 化石は発見されず、地質時代については不詳であるが、岩相的には沖縄本島の名護累層下部に対比可能であり、堆積時代は古生代二疊紀ごろと推測できる。

謝 辞

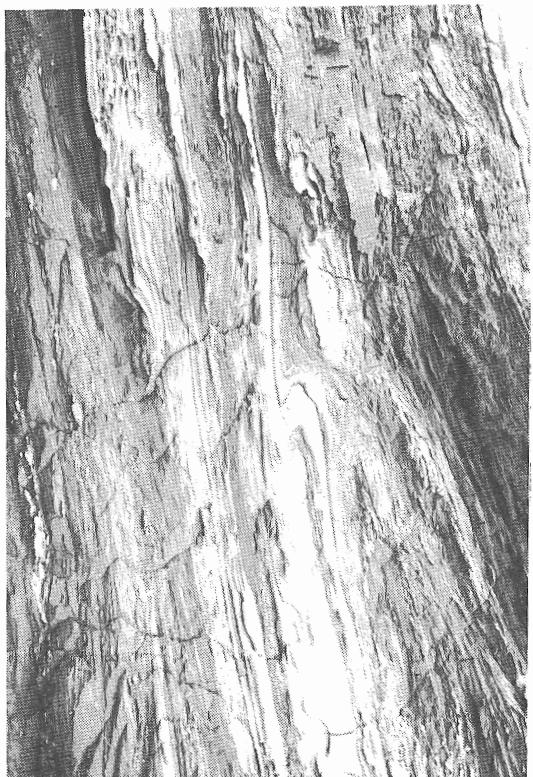
本地域の調査にあたり、河名俊男氏（琉球大学教育学部助教授）からは航空写真を借用させていただいた。また知念繁氏、宮里勇清氏、山城安市氏の座間味村史編集委員の方々からは調査の便宜を計っていただいた。お名前を銘記して、深く感謝の意を表する次第である。

参考文献

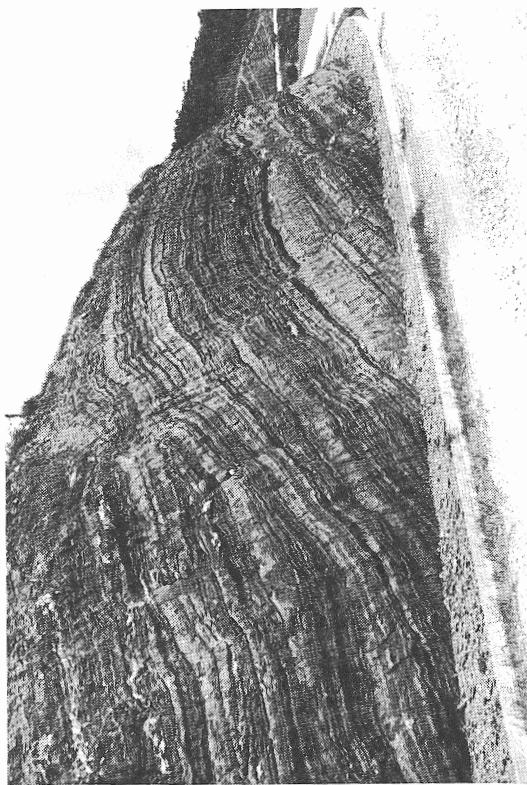
- 大城逸朗、1977、慶良間諸島屋嘉比および久場島の地形地質（予報）、沖縄県教育委員会、ケラマジカ実態調査報告書Ⅱ、1-7
- ———、1978、慶良間諸島阿嘉および慶留間島の地形・地質（予察）、沖縄県教育委員会、ケラマジカ実態調査報告書Ⅲ、1-10
- ———、1979、ケラマジカ生息地の地形地質とケラマジカ、沖縄県教育委員会、ケラマジカ実態調査報告書Ⅳ、91-94
- 鹿島愛彦・高橋治郎、1978、琉球弧、慶良間列島の地質、琉球列島の地質学研究、第3巻、31-38
- 遅沢壮一、橋本修一、吉田和郎、箕浦幸治、中川久夫、1977、沖縄本島北部の地質（中間報告）Ⅱ、琉球列島の地質学研究、第2巻、35-40
- 橋本修一、吉田和郎、箕浦幸治、中川久夫、1976、沖縄本島北部の地質（中間報告）琉球列島の地質学研究、第1巻、9-20
- ———、中川久夫、1978、沖縄本島北部の地質Ⅲ～琉球列島中部の地質構造について～、琉球列島の地質学研究、第3巻、23-29



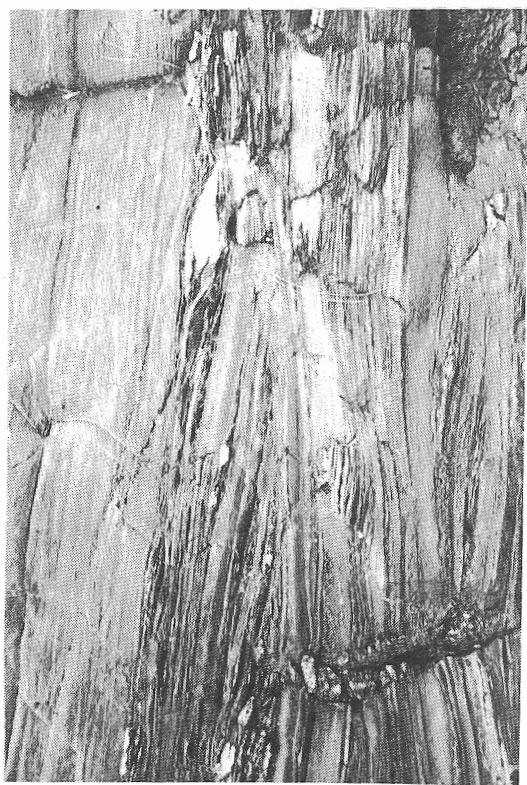
A : 阿佐の北東海岸、中央より左側は片状砂岩
右側は片状砂岩・千枚岩の互層



C : 互層部の層間褶曲構造



B : 座間味の北部山林道、片状砂岩・千枚岩互層



D : 片状砂岩勝ち千枚岩互層にみられる斜交層理

座間味島の岩相図

